

「復興ワードマップ研究会」(第9回) 2019年6月13日

出席者: 近藤誠司・宮本匠・石原凌河・大門大朗・宮前良平・立部知保里

<フリーディスカッション>

・これまで、「全壊・半壊・一部損壊」など、被災の程度にかかわるクライテリアの議論は、本研究会ではあまりしてこなかった。大阪北部地震の教訓は何かという取材が最近集中しているが、ひとつ共有しておくべき事項として、「一部損壊」ということばに、もっと目を向けるとよいのではないか。「一部損壊」ということばのイメージは、まさに「一部」の「軽微」な被害で済んだ、ということ。自力補修で問題なし、ということを想起させる。しかし実態は、隙間、亀裂、屋根の問題、家の傾きなど、きわめて深刻である。さらに、その後の台風でダブルパンチ、トリプルパンチになった人たちが大勢いることも忘れてはならない。

・家が壊れるくらい(倒壊、全壊)でないと、サポートが不要であるかのような印象をふりまいていやしないか。家の中の問題が「不可視化」されている。家の中の問題が、自助努力の領域として線引きされている。現代社会のセーフティネットの縮図が見える。

・大阪北部地震は、地震保険の支払額が、日本のこれまでの災害で3番目に多いという。エレベーターの閉じ込め案件も、東日本大震災のときを上回っていた。かなりエポックメイキングな災害だったのに、局所的な、ローカルな災害として忘却しようとしている。

・ことばを通じて、様々な問題を「横ぐしに刺して」考えることができるような研究を進めることが必要。たとえば、「復興」とは言うけれども、果たして、だれもかれもが「復興」しないといけないのか? 復興できないということ「受忍する」という生き方もあるのではないのか? 被災地から離れて暮らすとか、新天地を選び取るような生き方や、被災地の復興を遠くから見守る生き方、なんとなれば、事態を「やり過ごす」ような生き方などなど。そうした、いろいろな「生」を巧みに表現することばがない。

・山間の小さな集落に対して、「防災しろ!」とカンフル剤を打つこと自体が、もはや暴力的でもあり、そもそも立ち行かない。集落という単位に対して、いわば「看取り」をするような段階もあるのではないのか。南海トラフ巨大地震が起きたあとでも、きっとそのような局面が出てくるだろう。細々とした生であっても、それを受け止めて、さいごまで自分なりに豊かな生を全うしたいという思い、そうした生き様を支えることばや運動を、これからの日本は議論せざるをえないのではないのか。サポーターに見守る、看取る。「復興」ということばは、ある意味で「強い(筋肉質でマッチョでもある)」ので、そういうパワーに疎外されてしまう人たちが大量に生み出されてしまうことを、もっと想起しておかないといけないのではないのか。

・この論点は、いわば「復興」ということばのとらえ方の違いを浮き彫りにしている。「復興」ということばは、そうした人間疎外に対するトータルなケアを含みこんだことばだと考える論者も多数いるはず。新潟中越地震のあとでみんなが考えてきたことは、まさにそういうことだった。どうしたって元には戻らないし、過疎も人口流出も止まらない。そうしたことを前提にしたうえで、それでも復興したと言える地平ってどういうことなのだろうと考え抜いてきた。「それでもここに生きる！」という思いが育まれる地平とは、どういうものなのだろうか。しかし一方で、確かに「復興」ということばが強すぎる」というように、「復興」というのは、もとよりよくなること、というとらえ方もある。「復興」とは、災害の後をどう生きるかの問題。そしてそれは、「日常」と地続きになっている。

・しかし、「事前復興」の議論では、そういうナイーブな感覚はやせ細っているのではないか。今と同じようにがんばれることを前提にしているように感じる。著名な先生が言う「事前復興」は、災害後にやることになる事業をあわてて災害後にやるくらいなら、災害の前のうちにやっておけば被害が減らせるのだ、ということ。つまりそれは防災のコンセプトを言いなおしているに過ぎない(ということも、確信犯的に織り込み済み)。

・「復興しない被災地はない」ということばも聴く。その意図は、「大丈夫、がんばれ、明けない夜はない」ということ。何も根拠のないところでの「大丈夫だ」という宣明は、しかし、根拠のないことにおいて、理論的にはきわめて面白い。

・看取り、ターミナルケアなど、何か「復興」のカウンターとなるようなことばが欲しい。受忍と言うと我慢しているようだが、これと似ていると思ったことばに「老年的超越」ということばがある。高齢化するとボケる、機能が低下すると思われがちだけど、年を取ると、哲学的になる。突き抜ける。

・「無常観」について。宗教学者の山折哲雄さんは「日本人には明るい無常観がある」と言っている。「何も無くなってしまったね」と言いながら前を向いて生きていく。Y先生の「闊達」も、突き抜けたところにある地平ではないか。水害に見舞われた家族が「何もかも流されちゃったね」と言いながら笑う。印象的だし、心奪われる。『地の底の笑い話』と同じエピソード。みんな潜在的に持っている要素。カウンターになる言葉は、あまりハードルが高くない、平場も言葉がいい。

・これらは、英語の Reconstruction には含まれないニュアンス。Revitalization は通じるところがあるかもしれない。もう一度、生き生きしてくるということ。

・新潟県中越地震の被災地で語られたことにヒントはないか。ことばではなくて身構え、語り口、ふるまいなど、ことばにすると、かえって嘘くさくなる、その何かとは…。

・ある山間集落に通っている。約40世帯。毎年1世帯くらいずつ減っている。「消滅集落」と言える。50代以上しか住んでいない。知り合う人は大体70代。土砂災害の警戒をしようというプロジェクトをおこして、おばあちゃんたちと斜面の観測活動を始

めているが、間違いなく「ありがとう、でも、そういうことじゃないんですわ」という空気を感ずる。防火水槽にするために、廃校（休校）になった小学校のプールの掃除をした。けど、印象的だったのは、自生しているわさびを採ったとき。彼らにしてみれば、「そういうことなんですわ」ということ。彼らがやりたいのは、「防災・事前復興」とかではない。「交流人口・関係人口」ということばも、嘘くさい。もうその先を展望しているふしがある。われわれのほうが遅れている。

・しかし、学生が来なかったら、「そういうことなんですわ」ということさえも起こらない。「復興」ということが、暮らしを見つめ直して、そこに豊かさを見いだす機会だとすれば、考え直す機会があるということはハッピーだと思うが、それは何らかのサポート（外的刺激）がないと成立しえない。災害で言えば、生活のベースが満たされないと次のステージには進めないのと同じ。マズローの五段階図式の下の方の欲求が満たされないと、高次にはいけないのと同じ。そういう意味で、生活のベースを整えることは大事だと思う。

・被災前から（様々な指標が）緩やかに下がっていく地域に、学生などが入って自分たちの暮らしを見つめ直すということは、被災前とか後とかではなくて、被災していないけれども、ある意味で、いま現時点で「復興」を経験しているということかもしれない。

・生活のベースに関して言えば、「最低限の水準」というものを、住民が緩やかに落としてきている。価値を見つめ直すも何も、みんなすでにうすうす知っている。ジャガイモでパーティーしようという案が、外部からもたらされて、しかしそれはいまだに実現していない。そこまでの刺激はもう要らないというニュアンスがある。最後に大きな打ち上げ花火は不要であって、いまは線香花火をたのしむ程度で終わればよいというフィーリング。最終的に、集落をたたくことになるであろうことは、みんな薄々知っている。「復興」では「最低限の水準」も人それぞれだし、そもそもコミュニティを復活させないといけないと思うかどうか、人によって見解が分かれている。

・しかし最低限のレベルを下げるという話に関しては、最低限の支援をしましょうというスタンスを外から持ち込むと齟齬が生まれる。そこにいる人たちがどれだけのことを「最低限」だと思っているか。「復興」に関しても同じようなことが言えて、東日本大震災以降、「復興」というコンセプトを中央政府が牛耳って、「復興五輪」、「東北の復興をアピールしましょう」など、「復興」がイデオロギーとして使われている。東北が思う復興と東京が思う復興に温度差がある。

・都市計画の分野で、「縮退」の議論はどれくらいホットなのか？

・都市のスポンジ化の延長上で、郊外に空き家・空き地も増えていって、それに対する事業もないので、どうシュリンクしていくかという話題は、まさにホット。とはいえ、コンパクトシティはできないよね、ということで、今のところブームは終わっている。

・空き地の活用をNPOが考えたり、空き家を暫定的に公共が買い取ってそこを使えるようにしたり、小さなスケールでやらざるをえない。

・地域のオーナーシップみたいな議論は、社会科学系はしてもいいが、都市計画の人はそこに迎合してはいけないとも思う。スポンジ化でバラバラになったら効率も悪いし、生活の質も下がってくるという大所高所からの議論も、誰かがしなくてはいけないのではないか。こじんまりとした小手先の議論ばかりしていいのか。

・都市計画の研究の難しいところは、事業を作るのは、あくまで国であるということ。そこで出現した空間を所与のものとして評価したり住民の意向を聞いたりするのが、都市計画の専門家の役割（役回り）だったりする。地域のコミュニティレベルの議論しかできない。それはよくないと思うが、それしかやりようがない。

・「事前復興」と、きょうおこなっているような議論が、いかに相容れないかがよくわかる。「事前復興」は事業ベース、ハード事業。そこで、縮退だとか、集落を一箇所に集めてなんて議論はしていないのではないか。

・仮設住宅の用地を決めておくなどは大事なことだけれど、それは災害後の役所の仕事を減らすためのもの、要は役所の視点。それは確かに大事だけれど、住民がそのまちをどうしたいかという観点が出発点から抜け落ちている。

・防災に関して、外部者があまり立ち入らない方がいいこともある。あまり立ち入ると「足りない、限界がある」ということばかりを明らかにする。土砂災害で全滅するというシナリオもあるわけだけれど、それを言ってもしんどい。避難所になるかもしれない施設の裏が急傾斜地で、そのリスクが露骨に共有されてしまっている。せっかくカラオケセットがあって楽しく過ごせたはずなのに、今は誰も立ち入らない施設。防災を知ることがハッピーなドライブにはなっていない。ハッピーなドライブにはなっていないことに対して、専門家は見て見ないふりをしている。「あとは、どうぞ住民で考えて下さい」。合理主義的なおじいちゃんに、「もうソフト対策は要らない、高規格の道を造るしかないんだよ」と言われた。そのおじいちゃんに散々叱られた帰りがけに、庭の立派な銀杏の木に、ぎんなんが鈴なりになっているのを見つける。学生が「このぎんなん、食べられるんですか？」と聞いたら、いろいろお話をしてくれた。小さい頃にぎんなんを食べ過ぎて倒れてしまったエピソードなど。お土産に大量にくれた。そういうかわりの方がよっぽど大事なんだなと。災害が起きて人が亡くなるのは悲しいが、しかし「そういうもんだ（宿命だ）」と思っている人も大勢いる。その「生き様」を受け入れることが出発点なのではないか。

・地域全体は地すべり地帯で「レッドゾーン」、半分が土石流の「青」。ハザードマップを持ってそこに行くと、こちらからすれば、「なんでこんなところに住んでいるのか？」となってしまう。向こうからすれば、「なんでそんな地図をつくったんや！」となってしまう。答えも出せないのに、リスクを描きだし、それを突き付けるだけの傲慢。

・「余剰的同一性」に賭けること。自分たちがやっていることは未来で評価される×が含まれている。防災でやっていることが、それ以外のなまえで評価されるであろう未来。

いま「X」は言語化されていないけれども、しかし今そこにその萌芽はある。フラグを立てること。言語化することを放棄しない。明示的に意図的におこなう。

- 「防災」、「復興」ということばは、運動論のそのものなのかもしれない。
- その運動を阻害する要因が何なのかを考えなければいけない。「それも防災ですね」と認定することをやってきたが、もはや認定することもこざかしいのではないかとさえ思えてきた。人々は、ずっとそうやって生きてきたのだし。この「防災」というラベル自体が、薄汚れた金メッキ。
- なぜ、わざわざ生活防災と言わなければいけなくなったのか。「そういうもんですわ」という側を、うまく言語化できていない。専門家もことばを持っていない。ただし、日常の会話の中ではうまく出て来ていないことばが、あえて尋ねることで言語化されることもある。手記もそういうものとして位置付けられる。中越で、あえて「どのようなときに幸せを感じるか」と聞いたら、「朝起きて山際が白んで朝日が光っているのを見たとき」などの答えが返ってきた。
- 「防災」、「復興」という営みを、ときに真正面から見つめ、ときに裏側から見つめ、この営みの中心的価値と「X」をあぶりだすこと。

(了)